4 カレンとミライの小即興曲（インヴェンション）

応 般

中村裕美 | 産業技術総合研究所

木枯らしが冬の訪れを連れてきた肌寒い日でも，その会場は熱気で包まれていた．演者が舞台袖から出てくる．幾本ものポールが周りに立ったピアノのような機器の前で，演者である高校生ぐらいの少女は立ち止まり，観客のほうを向いて頭を下げる．割れんばかりの拍手の後，彼女が椅子に腰かけると，会場は静寂に包まれる．皆固唾を呑んで待っているのだ．それの始まりを．

彼女の指が鍵盤の上を踊りだす．そこからは，鍵盤が上下するかすかな音は聞こえるが，旋律は聞こえてこない．それでも観客は，彼女が奏でるそれに浸っていた．喉の奥からじわりと浮き上がった味が，彼女の手の動きに合わせて一気に舌先まで駆け上がっていく．甘味と酸味が舌の上で手を取って駆けずりまわり，そこに少しだけ塩味を含んだ刺激が添えられる．いや，塩味だけではない．少しスパイシーだ．舌触りのトレモロに少し癖をつけて跳ねさせ，辛味を作っているのだ．甘味を消さず，むしろそのスパイシーさで引き立たせるように．

観客は，恍惚とした顔を浮かべ，あるものは口元を抑え，あるものは滴る涎をそのままに，口腔内に広がるそれに酔いしれていた．

舞台の上の彼女が“演奏”していたのは味器である．味器は，楽器とよく似た見た目をしているが，そこから出るのは音波ではなく電波だ．正しくは，味を電気で出力するための，データだった．

10年前，電気味覚技術という舌に電気を与えることで味を作り出せる技術が世に出て以降，味を伝える技術は格段に進化した．味を配信する味覚配信技術によって，味そのものを多くの人に伝えられるようになるとともに，味を作り出す方法も料理にとどまらなくなったのだ．刺激の変化を時系列に作り出せればよいということで，特にこれまで音楽制作に使われてきたDAW（Digital Audio Workstation）などは味づくりにも活用されるようになった．

これがさらに形を変えるきっかけとなったのは，著名DJが音楽の代わりに味をジョッキーする，いわゆる「TJ（Taste Jokey）」ライブを実施したことに端を発する．その場で味が次々にミックスされ，その場限りの味のメドレーが作られる，その興奮を味わった観客が投稿したSNSを見て，とあるエンジニアが既存の楽器のような形状の味覚提示装置を作った．そしてその装置を使って，路上ライブを行ったのだ．“演奏”として出力したのは当時流行していた「あまあまタピオカ抹茶」だったが，緊張からくる弾き間違いやテンポの焦り，観客の熱狂を受けた“演奏の盛り上がり”は，配信で聞くその味であってどこか少し違う，たとえるなら楽譜とその演奏のような関係を作り出していた．

こうして，音楽の歴史を逆になぞっていくように，味覚の配信は味覚を奏でる装置を生み出し，楽典ならぬ味典のような音階および音色と味の知見もたまっていった．実装された味器の種類は多岐にわたるが，基本的に既存の楽器群を模したものが多く，弦楽器型，管楽器型も実装された．だが1人で和音からメロディまで奏でられる鍵盤楽器，特にピアノ型は冒頭の少女をはじめ多くの奏者が好んで使っていた．そして，そのライブでの“演奏”は一期一会の味体験を提供するものとして世の中にじわじわと溶け込んでいった．

＊＊＊

「カレンー！　疲れたー！　何食べて帰るー？」

これがさっきまで凛とした姿を見せていた有名“演奏”家，その真の姿ですよ皆さん．カレンは控室の扉を開けて入った先の，ソファのふちに体を預けてうつぶせた彼女を見て，心の中でつぶやく．

「まだすぐには帰れないでしょ．とりあえずはいこれ」

そう言ってカレンはディスプレイをたたき，飴の柄を選んでミライをデフォルメしたようなアバターに差し出した．味覚配信技術を使ったアプリの1つで，フレンド設定した相手には，アバターに食べさせると本人にも味を届けられる．

「飴ちゃんよりいまはがっつりしたものがいい．ラーメンとかー」

ミライは左手の指4本を使って和音を作り，右手はグリッサンドのフォームで右から左に動かしながらそう伝える．

「……豚骨？　……こってりすぎない？　私結構おなかいっぱいな気分なんですけど」

カレンは手の形から予想した味に眉根を寄せる．味だけとはいえ，フルコースを味わった後には少し重い．

「うん，今日のは美味しくできたでしょ！　でも私はおなかすいたのよね．やっぱり“演奏”は体力使うわー」

「昨日作ったマドレーヌならいまあるけど」

カレンは自分のカバンの中に目を走らせて，そう答える．

「カレンのマドレーヌ！　早くいってよ，そして早くよこせ」

「でもラーメンがいいんでしょ？」

「カレン様，お分けください」

ミライはソファの上でくるっと体を半回転させ土下座のポーズをとり，自分の頭の前に両手で椀を作る．カレンはあきらめたようにカバンに手を入れ，それをミライの手のひらに置いた．

「んー！　やっぱりカレンのマドレーヌ好きなのよね」

「それはどうも」

「将来はパティシエですかカレンさん」

「配信で十分だからもうからないでしょ」

ミライが向けてきたエアーマイクから少しだけ顔を背けて，カレンは答える．

「いや，味も食事もライブ感が重要でしょ！　あと質量がないとおなかが膨れないから」

そういいながらミライはマドレーヌを3口でたいらげ，指についたかすまで舐めとる．

「んー，おいしかった！　今日のはね，こんな感じ」

そういって唾液のついたままの指で，ミライは今日のマドレーヌを“演奏”した．

＊＊＊

熱心な観客が差し入れた花束やプレゼントを味器とともに車に積み込んだミライの父親を見送った後，私はミライと一緒に帰路についた．ミライの父親が運転する車に乗れないことはなかったが，ミライが，「ラーメンじゃなくてクレープの気分になった，食べて帰ろう」と提案したからだ．

外に出ると会場内がどれだけ熱気に包まれていたか，再度気付かされる．私はマフラーをきつめに巻きなおして，クレープにご満悦なミライの隣を歩いていた．

「プレゼント，めっちゃクリスマス感パなかったなぁ，もうそんな時期かぁ」

「まあまだ半月ぐらいあるけど．みんな好きよね」

「親父サンタにはもうプレゼント頼んだけど，カレンサンタには何お願いしようかなぁー．あ，3段ケーキがいいかなぁ！　クリームたっぷりがいい！　つくれる？」

「それクリスマスっていうより結婚式じゃない」

とミライに突っ込みつつ，ケーキという言葉と一緒に飲み込んだクレープのクリームが，私の脳裏に懐かしい景色を再生させる．

「ねえ，ぴあの，すきじゃないの？」

元気が体から溢れだしているようなその子は小さ

かった私の隣に座り，顔を覗き込んでそういった．
「きらい．ゆび，とどかないし，おこられるし」
　当時は負けん気の強かった私は涙目になった顔を見られるのがいやで，横を向きながらそう答える．
「ミライも，おこられた！　おたんじょうびけいきのうた, ひいたら, ちゃんとバイエルからやりましょう，って」
「おたんじょうびけいきのうたって？」
　怒られたのになんでそんな楽しそうなの，っていう前に気になったのがそれだった．
「おたんじょうびけいきのうたは，おたんじょうびけいきのうただよ！　おいしかったからつくったの．あ，あとたべられるむしのうたと，しゅわしゅわみどりじゅーすのうたもあるよ！」
と言って，彼女はピアノの椅子によじ登り，おもむろにピアノを弾きだした．
　それは，「ハッピバースデー」をベースにアレンジされた「お誕生日ケーキの曲」で，幼い私の目の前にはバースデーケーキを満面の笑顔で吹き消す彼女が見えたのだった．

　私とミライが出会った，幼稚園のころにはまだ味器はなかった．私たちはピアノ教室で出会い，実はご近所さんなことを知り，以降小学校，中学校で腐れ縁を醸成した．
　その間に味器は開発され，クラウドファンディングで資金調達が進み，少しずつ市販されるようになった．それを見て音楽教室も営む楽器メーカが，食品会社と一緒に自社製品を作成，音楽教室に導入した．そうしてミライは味器に触れ，元々上手かったピアノ以上に雄弁に味を奏でてみせた．ミライの親は，変わった食材とその調理法を調査研究する大学の教授で，彼女の家ではたびたび変わった料理が出された．彼女が「お誕生日ケーキの曲」なるものの後に弾いた苦味と旨味を想起させるような「食べられる虫の歌」が，何かの幼虫っぽい食用虫のフライだと気づいたのは，彼女の家に遊びに行ったときのことだ．感受性の強かったミライは食べて感動した喜びを自作の曲としてアウトプットしていた．味器ができて，彼女は音に変換せずに，自身の食の喜びを人に伝えられるようになったのだ．路上ライブのようなものを開催してから，彼女が有名になるまではそう時間がかからず，学校を休む日も少しずつ増えていった．
　きっと進路は別になるし，こうやって一緒に帰ることも，ずっと少なくなるかもしれない．それでも，彼女のライブにはこの先も行くつもりだ．差し入れのマドレーヌを口実に．いつかちゃんと頼まれたときには，3段ケーキだって作るつもりだ．
「あ，そうだカレン」
　ミライに名前を呼ばれ，私の意識は引き戻された．そして，
「私高校卒業したら，海外に行くことになっちゃった」
　ちょっと買い物行かなきゃいけなくなった，くらいの呑気さで告げられたそれに突き落とされる．
「は？　どうすんのあんたこの先」
「うーん，親が海外の大学に移るって．もう大学生になるし残ってもいいかなと思ったんだけど，面白い食材に会えなくなるからね，ついていこっかなって．幸い手に職？ついてるからさー，進路とか何とかなるでしょ」
　そういってからクレープを頬張り，「おいしー」とかます彼女に今の顔を見られないよう，私は少しだけ歩く速度を弱めた．
　そうなんだ．
　彼女の演奏のテイストは両親から恵まれる珍しい食材の影響を大きく受けている．その恩恵を受け続けていられれば，確かにここでなくても，彼女は多くの人の舌を魅了するだろう．ミライの判断は少し過激かもしれないけれど，そんなスパイスだって彼女は演奏の糧にするだろう．
　だけど．
　ミライにとっての私が，とても小さい存在のように思えて．

多分，今，私のクレープのほうが，苦い．
「で，3月の終わりにライブやるんだけど，多分ここでやるラストライブになるだろうから，ちゃんと来てよー．お願いだからね！」
そういいながら振り返ったミライから私は視線をそらして，
「……いかない」
と吐き捨てるようにつぶやいた．

＊＊＊

カレンは，あれからミライとほぼ顔を合わせていなかった．そもそもミライは練習，カレンは受験とせわしなかった上に，ミライが教室に顔を出すときにはカレンはそこにいなかった．いないようにしていた．
それでも，来た日にミライはカレンの机の引き出しに，招待状を入れていく．今のご時世チケットはネット経由での購入がメインで，招待状を送ったりなんてない．だから招待状と言いつつ，ミライが好きなキャラクタの便せんと，自筆で書かれたメッセージだけだ．
「……くるつもりなんて，なかったのに．」
カレンが持った紙袋が，まだ肌寒い春の風でかさかさと音を立てる．彼女はもう30分，会場の前で入るかどうか迷っていた．

「今日の『お品書き』，彼女らしくないな」
寒いから，少し風を除けたいだけ，そう言い訳しながら正面ゲートの自動ドアをくぐったカレンにロビーでの会話が聞こえてくる．開幕まではもう時間がないので，ロビーにいる人はまばらだった．
「なんか……今日のは少し子供っぽいわよね」
「まあ彼女もまだ高校生か．なに，気まぐれだよ，少しいつもと違うのでもやってみたかったんじゃないか」
「私はあの隠れ家的で癖のあるレストランみたいな感じが好きなのよ」
「お品書き」を事前に公開するか，当日に知らせるかは“演奏”家によってまちまちだったが，ミライは当日に公開するタイプの“演奏”家だった．「それでもみんな来てくれるのよね，口に合うかなんて分からないのに．物好きな人たちよね」と休みの日にパスタを食べながらこぼしていたミライを思い出す．ミライのチョイスと“演奏”が好みだから来てるんでしょ，と伝えるのは癪で，すこしくどいソースがからんだパスタと一緒にすすりこんだけど．
急ぎ足で向かった受付でもらった「お品書き」は，確かにいつもの彼女らしくなかった．普段は，「真鯛のソテー　～ブールノゼワットソースで～」みたいなこじゃれたモノか，「“牛フィレ肉のロッシーニ風”のロッシーニ風」のような遊びを含むもの，はたまた彼女の家庭環境が生み出した「アフリカウシガエルのフリット」みたいな時期を間違えると病気になりかねない謎料理で，フルコースを作るのが彼女のテイストだった．それが今日は
「クレープ」
「カルボナーラパスタ」
みたいなショッピングモールのフードコートを思わせるラインナップが異様に多い．
もっとも，ミライがそういうラインナップをまったく“演奏”しないわけではなかった．放課後の教室で，遊び半分に弾いて同級生とはしゃぐ，それだって彼女の一部だった．ただライブでも間に挟むときは，あくまで箸休め的な立ち位置だ．そしてたいてい新解釈を添えて出してくる．
極めつけは，定番デザートだった「少女の焼菓子」が先頭で，そしてリストの最後に
「イチゴのショートケーキ」
が並んでいることだ．これは確かに彼女らしくない，と言われても仕方ない．
なんで，と狼狽しているうちに，開演が近いことを知らせる1ベルがなっていた．カレンは先ほどの会話をしていた2人の後ろに続き急いで会場に入った．

“演奏”が始まったにもかかわらず，観客席はまだざわめきが残っていた．むしろいつもは静まりかえるはずが，今日は始まってからのほうがざわめきが大きくなった気さえする．
「なんか今日は……“演奏”も安いな」
「あの『お品書き』でもあり得ない解釈を加えてくるのがミライだろ．今日はなんか……普通，だよな」
「いや，そう見せかけて，実はここから驚きのテイストを繰り出してくるんじゃないか」
そう観客が好き勝手にささやく声は，カレンにはあまり届いていなかった．
（こんなの）
カレンは唇をかみしめる．
（気鋭の“演奏”家，ミライじゃない）
握りこんだ手のひらに爪が食い込んでいく．そして唇の端から滑り込んできた塩味に，カレンは自分が泣いていることに気付いた．
今日はこの先も，いつもの彼女にある新解釈やしゃれこんだテイストは出てこないだろう．それを分かっているのは，おそらくこの会場の中でカレンだけだ．ほかの観客としては，期待外れもいいとこではないだろうか．今日を境にファンも減るかもしれない．ああ，それでも問題ない，皆知らないだろうけど，彼女がまたこのあたりの舞台に立つのは，ずっと先のことになるだろうから．
菫の砂糖漬けの甘さはの味覚配信アプリがだすチープな味だったし，パスタに絡むソースは，喉奥を過ぎてもまだ舌の上に味が残る．冬の日のクレープは甘さの中にほろ苦さが入り混んでいた．そして最後のショートケーキは，誕生日の味がした．
（こんなことされたら，もう許すしかないじゃない）
今日のミライの舞台は，1人の友人との思い出のフルコースだった．

＊＊＊

私はソファにもたれかかり，足音が，途中で止まりながらも近づいてくるのを聞きながら，今日の“演奏”を振り返っていた．私がつけていた味情報受信デバイスは，自分の演奏がどんな味だったか，そのフィードバックを返す．会場の広さや構造，発信用のデバイスの影響も受けるので，味器に一番近い私が受けているフィードバックと，観客が感じるものは少し違う．少なくとも，私にとっては今日の“演奏”は会心の出来だった．彼女に届いたショートケーキも，ちゃんと誕生日の味がしてくれただろうか．
足音は，控室の扉の前で止まってしまう．私がアプリを立ち上げて，飴の柄の画面をタップすると，びくりとした気配と，観念したかのようなため息が聞こえてくる．
「私は飴よりべつのものがいいんだけどなー」
私は控室の扉を開けたその人物の方に振り向かずに話しかける．その少女はそっと，紙袋を私の目の前に差し出した．
「これこれー．もう当分食べられなくなるんだね」
「ここにいれば，いつでも作るけど．」
その言葉にはこたえず，いつもより多く時間をかけて，私はマドレーヌを食べきる．そして，いつも通り指についた食べかすまで完食して，鍵盤に手を置いた．そしていつもひっそりと押していた録味ボタンを，今日も押す．
「質量は持っていけないけど，これだけは持っていかせて」

（2019年10月4日受付）

■中村裕美（正会員） hirominakamura.b@gmail.com
産業技術総合研究所情報技術研究部門メディアインタラクション研究グループ産総研特別研究員．2014年明治大学大学院博士後期課程修了，博士（工学）．電気味覚を用いた食メディアの開発や，視聴覚メディアの創作に関する研究に従事．第20回メディア芸術祭エンタテインメント部門優秀賞等受賞（執筆時は上記所属だが，2019年10月より東京大学情報学環暦本研究室特任助教に着任）．